

【巻頭言】

# 中京大学経営学部を去るにあたって

中京大学経営学部教授 猿田正機

下記の文章は私が永年、ゼミの学生募集にあたって書いていた「プロフィール」の一端である。

1944年北海道三笠市幾春別町に生まれる。

北海道に18年、東京に17年、愛知に来て26年目と、生活の場は日本列島を南下してきた。その地域にはその地域の特性の強さを感じている。

また、目を外に転じると、国際化・情報化の流れのなかで世界は増々狭くなり、相互に影響し合うスピードも日増しに速くなっている。最近はとくにトヨタとスウェーデンに興味をもって研究している。

そのような環境のなかで、専門とする労務管理、労働政策、労使関係の分野にも、一般性と普遍性とともにも地域的視点を入れた研究の必要性を痛感している。また、可能な限り世界に視野を広げ研究・教育のなかに生かしていくように心がけている。

昔は北海道の山や川で実に色々なことをして遊んだ。中学生の頃は近所のおじさんとしょっちゅう囲碁をしていた。しかし、今は趣味らしいことは残念ながら何一つしていない。暇をつくっては家族で海外旅行をしたり、また家族やゼミの学生たちとソフト、ボーリング、テニス、スキーなどをするのが私の楽しみである。

私の中京大学での学部生活は商学部の時代と経営学部の時代に大きく二つに分けることができる。大学院は経営学研究科時代の前期と経営学研究科とビジネスイノベーション研究科に二分された後期に分けることができる。

学部生との付き合いは、無我夢中で一生懸命学生と格闘した前期と忙しくてあまりゆっくり話し合うことのできなかつた中期と比較的じっくり話し合うことのできた60歳代の後期とに分けることができる。年齢とともに学生との付き合い方も随分と変わった。学生たちにもっともっと何かしてやれたことがあったのではないかという思いは今も残る。

これまでに大学で担当した科目は、労務管理論（人的資源管理論、人材マネジメント入門）、社会政策論と経営学史である。大学院では労務管理（人的資源管理）演習・研究を担当し、ビジネス・イノベーション研究科では、短期間ではあるが、人的資源管理を担当した。研究テーマは「自動車産業（トヨタ）の労務管理・労使関係」である。

私にとってもっとも幸いだったのは、とにもかくにも学部ゼミ生や大学院生、研究生がたくさん来てくれたことである。日本人のほかには韓国人、中国人そしてモンゴル人、ベトナム人である。もっと

も多かったのは中国人であった。中国の学生・院生からも非常に多くのことを学んだ。大学院の指導は大変であったが、嬉しいことも多かった。結婚、出産、就職などなんと「おめでとう」と言ったことが。もっとも嬉しくまたホットしたことは博士課程を修了した院生が愛知東邦大学と公立の三重短期大学に大学教員として就職したことである。苦労を重ねて頑張った中国人学生が博士号を取得したことも喜びであった。私の指導した学生ではなかったが、研究科長時代に、言葉の壁もあり健康を害すほどに悩み苦しみ、私も相談に乗り、とうとう頑張りぬいて博士号を取得し、現在、スリランカに帰国して活躍している院生の姿も忘れられない。今も、連絡がある。院生には海外での調査研究を経験させるよう心がけた。ドイツ、スウェーデン、フランス、中国、韓国などを在学中に訪問した。研究を続ける上できっと役に立つのではないかと思う。経営学部・経営学研究科で青春を過ごしたすべての学生・院生の今後の平穏と活躍を祈りたい。商学部時代の思いでも少なくないが、ここでは省略したい。

三戸公先生と小川英次先生との出会いは、それまでの教員との交流とは違い、私には新鮮で多くのことを学ばせていただいた。小川先生には学長退任後に、理事長への再登板ということで、大学のことでも最後の最後までご苦労をおかけすることになってしまいまことに申し訳なく思っている。三戸先生とは中京大学を去られた後の方が身近に感じられるようになった。それは私が「経営学史」を担当することになり、三戸先生の書物を参考にさせていただくことが多くなったからである。三戸先生はこんなことを考えられていたのか、と思うことも度々あった。短い間であったが、田中博英（経済学部）のことも忘れられない。

大学の組織とはいえないが、私にとって最も頼りになり勉強になったのは中京大学教職員組合である。多くの良き仲間にも恵まれた。前々理事長とは随分言い争いをしたが、私は私なりに中京大学の発展に尽くしたつもりである。教育研究条件の向上や賃金・労働条件の改善はその一端と言える。もちろん私だけで出来たわけではない。多くの先輩の諸先生方の努力に何がしかの協力をできたのではないかという思いはある。私が書記長の時の吉田祥二委員長や清弘理事長を支えた寺川博氏のことは忘れられない。

また、中京大学を立地を含めて最大限に利用させていただいた。多分、在任中を通して、私ほど中京大学を実質的に利用尽くした教員はほとんどいなかったのではないかとさえ思っている。学会の地方部会や全国大会は言うまでもなく、スウェーデン研究者やドイツ（日独セミナー）やイギリスの研究者との交流の舞台として宿泊施設を含めて大いに利用させていただいた。いわゆる「中京ホテル」は海外の研究者との研究交流にとってはこの上なく便利なものであった。これが取り壊されることには惜別の念を禁じえない。30年以上続く現 PWO（生産・労働・組織）研究会やスウェーデン研究会などの会場としても共同研究室や会議室を使わせていただいた。立地の有利さが大いに役に立った。一人ひとりの教員が伸び伸びと教育・研究のできる環境が維持・発展することを心から祈りたい。

トヨタ研究などを通じて海外の研究者とも交流ができたことは望外に幸せなことであった。とりわけ留学でお世話を頂いた、当時、Goteborg University にいた Kajsa Ellegard（現 Linköping University）とパートナーの Bertil Vilhelmsen（Goteborg University）とも懇意にさせていただき、家族ぐるみの付き合いが今も続いていることは、望んで得ることのできない、スウェーデン研究のこの上ない副産物といえよう。

また、Goteborg University の Lennart Nilsson や Chalmers University of Technology の Tomas Engström, Lars Medbo, Carl Wänström などとは今も共同研究が続いている。これが可能なのも、30年以上も続いている PWO 研究会の素晴らしいメンバーのおかげと感謝している。

トヨタ研究の一環としてのボルボ研究などで北欧・スウェーデンという国に出会えたことも私の人生・研究にとってこの上ない幸運であったと思う。スウェーデンで、妻と二人での調査の日々で出会っ

た多くの人たちには心からお礼を言いたい。

私の所属している愛知労働問題研究所と交流のあった Bremen University の Heiner Heseler や Rainer Muller, Jochen Tholen, Heinz Brauer など「中京ホテル」に宿泊しつつ数度、日独シンポを行ったことが忘れられない。ブレ-メンにも何度か訪れ研究会や職場・工場や歴史的建築物を親切に見学・案内などをしていただいた。これも労問研のメンバーの協力なくしては成しえなかったことである。そして、トヨタ研究で協力した、心優しいイギリス、Paul Stewart (University of West of England) も忘れがたい人物であった。彼も「中京ホテル」宿泊者の一人である。これらの経験で私が大きな成果を得ることができたのはすべて、いつも私とともに参加し行動してくれた私のパートナーである妻・淑子の助力のおかげである。感謝の言葉もない。

来日しトヨタのグループ企業で働き、私のところへ来訪し、いろいろな質問をし、アメリカに帰国してから大学院に進学し研究者になり“NOTS FROM TOYOTA-LAND AN AMERICAN ENGINEER IN JAPAN”を出版した DARIUS MEHRI や京都大学に留学し、度々私たちのところへ訪れ、また、フランス・トヨタの労働組合調査でお世話になり、現在、GERPISA で働いているフランス人 Stephane Heim、さらにはニュージーランド Massey University の Wayne Macpherson など、私がサポートした少なくない外国人の若者が世界で活躍する姿をみている嬉しさを味わえるのもトヨタ研究のおかげといいだろう。

このように良い環境でトヨタ研究ができたことで学会でも、以前では、信じられないほど多くの友人・知人ができ議論することもできた。また、数多くの内外のマスコミの訪問も私にとっては情報収集のよい機会となった。

学部を担当していただいた職員の方々にも大変お世話になった。いつも頭に浮かんでくる。中小企業研究所のことも思い出すが、企業研究所も最後になって思いで深い場所になった。所長時代やトヨタ関係の文献・資料の整理などで、2人のパート職員にはひとかたならぬお世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。

退職へ向けて、早くから本の整理は徐々に進めるよう心がけていたが、最後の3年間は大変であった。1冊1冊確認しつつ整理した。図書館にない図書は図書館に入れたり、企業研にトヨタ関係の資料を寄贈したり、教え子にあげたり、家に持ち帰ったりなどした。それだけに、なぜこの本を買ったのかが思い出され手放したくなることもないではなかった。しかし、家に持ち帰れる分量には限りがある。

最初の頃の夏は北海道への里帰りであったが、父母が亡くなった後は、家族とは幾度となく海外旅行を楽しんだ。毎年、正月頃に今年は何時どこへ行こうかと話し合ったものだ。最後の1年は予想以上に忙しかった。学会活動など若い人に頼まれた仕事を断れずに引き受けた。忙しい中で、淋しくもあり楽しくもあり、であった。

私にとって中京大学の35年間は第3の人生ともいべき時代であった。第1は、北海道での18年間で自然とともに生きた時代であり今も温かく心によみがえる。それに続く、大都市・東京での17年間は高度経済成長期の激しく揺れ動く時代を直視し、考え悩み苦しんだ第2の人生といってもよいかもしれない。しかし、今考えると心がワクワクする本当に素晴らしい時代であった。そして、今中京大学との別れで第3の人生との別れを告げることになる。退職後の第4の人生へ向けて、最後をどう生きるか。現在は、部屋を整理しつつ日々、中京大学がどんどん遠くなりつつあるのを感じる。むしろ退職後の方が懐かしく想うことになるのだろう。

研究者という道に入ったこともあり、慶応義塾大学・大学院時代にお世話になった4人の恩師のことは心から離れたことはなかった。佐藤芳雄先生、野口祐先生、伊東岱吉先生、黒川俊雄先生には心からお礼を述べたい。また、国内留学でお世話になった立命館大学の戸木田嘉久先生や三好正巳先生

にもお礼を言いたい。

これまでお世話になった多くの諸先生方や職員の皆様のお顔を思い浮かべつつ中京大学を去りたい。最後になったが、人生の大切な時期に、学部で一緒にいた諸先生方には、心からお礼を言いたい。随分と悪態をつきご迷惑をおかけした先生方も多かったらうとご推察するが、出会ったすべての教職員の皆様に心からお詫びと感謝を述べたいと思う。また、今後のご活躍を期待したい。

以下は、中京大学へ勤務中に私が行った研究の足跡ともいえるべきものである。それぞれに思い出があり人生がある、忘れがたき原稿の数々である。

当初は、日本における労務管理・労使関係を研究課題としたが、その後、メインテーマは「トヨタの労務管理・労使関係研究」となり、サブ・テーマは「企業社会・日本」と「福祉社会・スウェーデン」の比較研究となった。それなりの研究成果を出すことはできたが、テーマ自体があまりにも巨大であり、やり残したことも多いが、後悔はない。

在籍中に会った学生・院生の思い出も数知れずあるが、ここでは省略したい。また、労働組合活動や社会的活動についても書きたいことは多いが、ここでは触れない。

最後に、一言触れておきたいのは、日本社会の現状についてである。大地震・津波、原発事故、金融危機、沖縄問題、尖閣・竹島問題など大事件が相次いだ。激動の中で次々と難問に直面し、期待されて登場した民主党政権はあえなく崩壊した。日本の政治にとっては大いなる不幸と呼んでいいかもしれない。

私は経営学部で「ヒト」の問題を担当してきたが、講義していて年々、感じたのは日本の労働者の労働・生活状態の著しい悪化であった。この国際化・情報化の時代にILO条約の批准すら遅々として進んでいないだけでなく、女性・若者の労働・生活環境の悪化は著しい。中京大学に女子学生が増えことは喜ばしいのだが、その女性の地位が国際的にみてどんどん低下し、男女平等ランキングが101位になるのを見て退職というのはいかにも悲しく・寂しいことである。また、若者の雇用環境も非正規雇用の激増にみられるごとく著しく悪くなった。「ブラック企業」と言う言葉も日常化している。教え子の卒業後も心配させられる。そしてここへ来て「特定秘密保護法案」の衆院・参院の強行突破による可決である。国民の上に国家を置き、教科書検定制度とともに若者や市民から、国民の「知る権利」「生きる権利」を奪おうとする自民党・公明党の暴挙には引き続き抗議をしていかなければならないだろう。この先には、集団自衛権の容認や「憲法9条」の改悪問題がある。教育に携わる人間として、若者を戦争に駆り立てることだけは最低限、阻止することに努力したいものだと思う。